

小林正樹監督「東京裁判」



■ 2 ■

11日に大分市のシネマ5で1日限定で上映。太平洋戦争後に連合国が戦争犯罪人を裁くために開いた「極東国際軍事裁判」。米国防総省が撮影した記録フィルムなどを編集。当時の世界情勢や戦勝国の思惑、日本が開戦までにとどった道のりが、名優、佐藤慶の重厚な語りとともに

につづられる。昭和天皇に責任はあるのか。原爆を落とした国が戦争犯罪を裁くことはできるのか。戦後処理という言葉を超えて、太平洋戦争とは何だったのかを振り返っていく。初上映は1983年。2019年にデジタルリマスター版が公開された。

どんな戦争も罪問うべき

日本文理大・大塚建さん(21)の思い



「先人の経験からなぜ争いが起こったかを学び、生かしていかなければならないのではないか」と話す大塚建さん＝日本文理大

「太平洋戦争全体の歴史をひもとき、明らかにしている映画だと感じました」。日本文理大工学部4年の大塚建さん(21)はこれまで学校で日本の近代史についてきちんと学んだという記憶がないという。

「A級戦犯という言葉や、東条英機、重光葵らの名前を聞いたことがありませんが、裁判の中身については深く知りませんでした。もしかしたら高校で習っていたかもしれないですが」。昭和史、特に太平洋戦争からの歴史は駆け足の授業にな

るので、みんな記憶に残っていないのではないかと。最新の技術でよみがえった記録映画の映像はリアルで、登場する人々が発する言葉にも重みがある。「価値観が違うので、当時の証言を理解できずにモヤモヤすることもあった。でもモヤモヤする必要があるかもしれない。戦争に関心を持つきっかけになるのではないのでしょうか」

大塚さんを引きつけたのはA級戦犯の弁護をした米国人弁護人が「国際法に従って戦争する以上は殺し合いも合法である」

とおつか・たける、2001年生まれ。日本文理大工学部情報メディア学科で映像製作を学ぶ4年。好きな作品は「善き人のためのソナタ」など。

と発言するシーン。無罪を立証するための論理ではあるものの、現在も軍力で外交問題を解決しようと試みる国はなくならない。

大塚さんは「どんな戦争も罪を問われるべきだと思います。だからこそ、自分たちは、先人の経験からなぜ争いが起こったかを学び、生かしていかなければならないのではないか」と力を込めた。

記者の感想

大塚さんが「若い世代にとつて太平洋戦争は黒歴史(消し去りたい過去)になっているのではないか」と語っていたのが印象深かった。日本人として戦争を考えるということは南京事件や慰安婦など加害者としての側面にも向き合う必要がある。そういうことに戸惑いを感じる若者も多いだろう。だが、一度と過ちを繰り返さないためには史実から目をそらしてはならない。記録フィルムがそのすがすがしさと感じた。(大江謙一)